横浜市小学校社会科研究会

５学年部会

研修会記録

第　２　号

令和４年　　８月　１日
横浜市小学校教育研究会
会長　　徳江　武司
横浜市小学校社会科研究会
会長　　加藤　和之
同　学年部長　　宮原　美由紀

【提案日時】
７月　６日（水）

【会　場】
横浜市立　　平沼小学校

提案　　金澤　範明　先生（瀬戸ヶ谷小）
司会　　吉岡　倫美　先生（飯島小）
記録　　田澤　哲哉　　（常盤台小）

１．単元名

「高地に暮らす人々のくらし　～信楽高原朝宮地区の茶栽培～」

２．提案者より

〇信楽高原朝宮地区について〇

扱った意図

教師の出身地と近い
→子どもたちにとっても
　身近なものになる

朝宮地区の茶栽培

標高400～500m
茶栽培に適した気候を生かしてつくる高級茶
→風味が出る

〇提案について〇

視点①　子どもの「身近」と比較することからの単元づくり（高地に焦点化）
視点②　板書計画や座席表への児童の考えの記入による授業デザインの構成

【単元計画】

第　１　時　信楽町と横浜の比較→「単元を見通す学習問題」の成立
第　２　時　信楽町の地形・気候（横浜との比較を通して）
第３・４時　信楽町の産業　朝宮茶の試飲
第５・６時　朝宮茶と信楽町の地形・気候とのつながり
　　もうからないけど新芽だけを摘む事実→「本気の学習問題」の成立

生産者のHさんはもうけたい

第　７　時　本時
第　８　時　まとめ

3. 協議会

協議内容の中心【視点②】
朝宮茶を**広げていくよさ**や、ここでしかとれない**朝宮茶への誇り**を子どもたちがより主体的に追究するには…

実際の授業では…
「もうかる／もうからない」の話題について話す時間が多くなってしまった。

【どのような手だてがあったか】

教師の問い返し
C29が
「みんなに知ってもらうことを最優先」と発言したことを受けて、
知ってもらうことの意味を考える

学習問題
学習問題の「もうからないと言っているのに」という文言ではなく、広めようとしている理由を考えられるような学習問題にする

言葉の資料後の焦点化
言葉の資料を出した後に、「どう思う？」というざっくりとした聞き方ではなく、広めることに焦点化した聞き方（誰に？何のために？など）をする

板書
自然環境を生かした茶栽培にかかわることを中心に板書し、「そうしてつくった朝宮茶を広めていきたい」というHさんの思いにつなげる

【授業記録の後半を読むと…】
C14、C24、C32の発言は、**信楽町の地形や気候と関連付けた発言**になっている

最後の試飲の効果が大きかった？

本時までに、信楽町の地形や気候についての学習が積み上がっている

単元を通して子どもがどのような事実と出合い、どう学びを積み重ねていくかが大切！！

＜講師の先生より＞　荏田小学校　伊藤　智樹　校長先生
産業の学習において、生産者が利益を求めて仕事をしている事実と出合うことは自然なこと。その中で、利益を生むため、ブランド維持をするためにどのような工夫・努力をしているか、その中身を追究していくことが大切である。冷涼な気候を生かして出荷時期をずらすことができる高原野菜のメリットのように、信楽でお茶を育てるメリットを考えたい。出荷時期にずれがあったり、香りや味に差が出たりするメリットがあるのではないか。目に見える事実から、目に見えない人の想いに迫っていけるようにしたい。教師の発話量はなるべく少なくしたいが、指導的意図があれば介入も必要になるため、教師の出について吟味することも大切。

文責　　田澤　哲哉　（常盤台小学校　）